

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

台東区谷中 朝倉彫塑館散策

私は中学生の頃、ラジオの歌番組に出演したことがある。声楽家が定期的に出演していた番組だと思いが、合唱に駆り出され、ラジオ局に行き一〇〇人ほどで歌ったのだ。その時歌ったいくつかの曲の中で、今でもはっきり覚えているのだが滝廉太郎作曲の「荒城の月」である。

以来私は、何か歌う機会があると、「荒城の月」を朗々？と歌う。今どきの曲のスピードからすると、五倍ぐらいスローな曲を、人前でその気になって歌うのだから、日頃の恐れを知らない性格が、顔を出しているときか思えない。

そんな思い出につながる「荒城の月」が舞台になっているのは、大分県の岡城だ。大分出張があった時に岡城を訪れ、この曲にぴったりの情景に浸ってきた。さすがに他の訪れている方々に聞こえる大声では歌えず、小さく口ずさんで石段を登ったのが若干心残りだった。石段を登りきると、そこには当然のように滝廉太郎の銅像が立っていた。

その時はこの銅像の作者は誰だか知らなかったのだ

が、台東区谷中の「朝倉彫塑館」が改修したという話を聞き、先日、在住の知人の案内で訪れ、そこに滝廉太郎の銅像が展示されていた。本当にびっくりしたのだが、朝倉文夫の生誕の地が大分県豊後大野市だったのだ。私は急にこの彫塑館が改修物件としての関心だけでなく、とても身近なものに感じられた。

朝倉彫塑館は、下町の風情を残す寺町の谷中に、アトリエ兼任住宅として建てられたものだ。明治四〇年に建てられて以来、増改築が繰り返され、昭和一〇年に今の建物として完成した。鉄筋コンクリート造の、天井が一〇mを超えるアトリエとそれに続く木造の住宅棟。芸術家の自邸らしく、本人の強い意向が反映した数寄屋造りで、見事な細部の造作に加え、巨石と池を絶妙に配した中庭の周りの居間や寢室を配した構成は見事というほかない。

たまたまの雨模様もかえって中庭の風情を増し、造園家の卓越した技と思いが伝わってきた。国の有形文化財として登録されたこの建物を保存修復するに当っては、文化的価値を損なわない改修を行うため検討委員会が設置されたという。五年程前から進められ、平成二五年一〇月にオープンした。修復にかかった年月を考えると、修理・修復・耐震補強作業の難しさが感じられる。ちなみに、早稲田大学の

大隈重信侯の銅像も朝倉文夫の制作によるものだ。早稲田にある像の原型の複製ではあるが、触れるほどの近い距離で朝倉彫塑館では鑑賞できる。朝倉氏と大隈侯がなぜ親しかったのかは分からないが、大隈侯が佐賀藩士だったことと関わるのだろうか。

さて、今も江戸がある街と言われる谷中界隈は、谷中せんべい、谷中の佃煮、そして白生地のお餅やきは絶品……と、下町散策としてなかなかのものだ。さらには若者による街興しも行われ、古い住宅がオフィスやカフェに改修され見るべきものが多い街だ。

街並み保存と建築基準法との難しい狭間問題を考えてながらの散策スポットに、ぜひ朝倉彫塑館も加えていただければと思う。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。日本建築家協会正会員。」